資料４

果実の需給見通しについて

平成１７年２月１８日
農林水産省生産局

目　　次

1　果実計 ---------- 1
2　うんしゅうみかん ---------- 2
3　その他かんきつ
　(1)　国産 ---------- 3
　(2)　輸入 ---------- 4
4　りんご ---------- 5
5　ぶどう ---------- 6
6　なし ---------- 7
7　もも ---------- 8
8　おうとう（さくらんぼ） ---------- 9
9　びわ ---------- １０
10　かき ---------- １１
11　くり ---------- １２
12　うめ ---------- １３
13　すもも ---------- １４
14　キウイフルーツ ---------- １５
15　パインアップル ---------- １６
16　バナナ ---------- １７

（参考）　果実的野菜の消費動向 ---------- １８

1　果実計

○　果実の消費量（国内消費仕向量）は、生活スタイルの多様化等による食の外部化、簡便化志向の進展により、生鮮果実を中心とする国産果実の減少、果汁を中心とする輸入果実の増加等により輸入品のシェアが高まる中、全体としては、ほぼ横ばいとなっている。

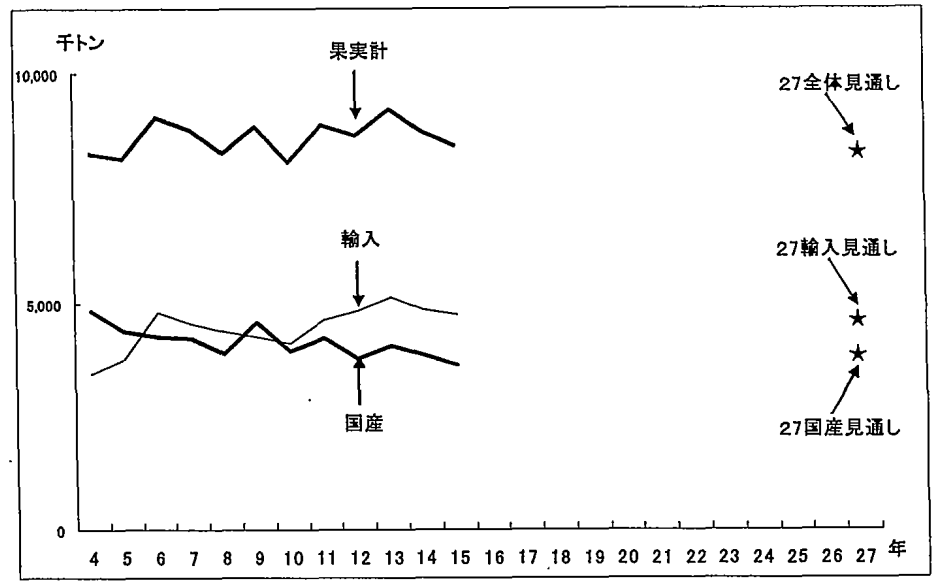
今後、輸入果実が増加する一方で、国産果実は引き続き減少することが見込まれる。

しかしながら、消費拡大対策の効果的な実施により、国産生鮮果実の消費量が増加し、輸入果実のシェアが低下するとともに、食べ残しや廃棄の減少による消費量の減少、人口の減少等を考慮して、果実全体の27年度見通しは、現状と同程度と見込んでいる。

○　一方、生産面では、高齢化の進展、後継者不足等に加え、品目によっては需要の減退や価格の低下により、生産意欲が減退していることから、近年、栽培面積が減少傾向にあり、果実全体として生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

27年度目標については、栽培面積は減少すると見込まれるものの、需要に見合った国産果実を供給するため、品種の更新等が進み、産地の構造改革による単収の向上等により、生産量は現状と同程度と見込んでいる。

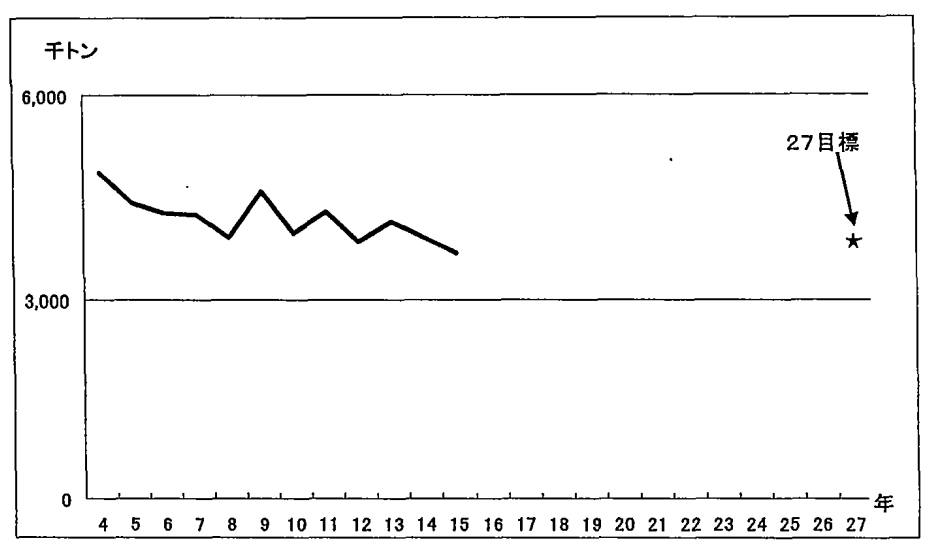
○　果実の消費量の推移及び27年度見通し



資料：農林水産省「食料需給表」、「果樹生産出荷統計」及び果樹花き課調べ（以下同じ）。

注：平成15年は速報値である（以下同じ）。

○　果実の国内生産量の推移及び27年度目標



2　うんしゅうみかん

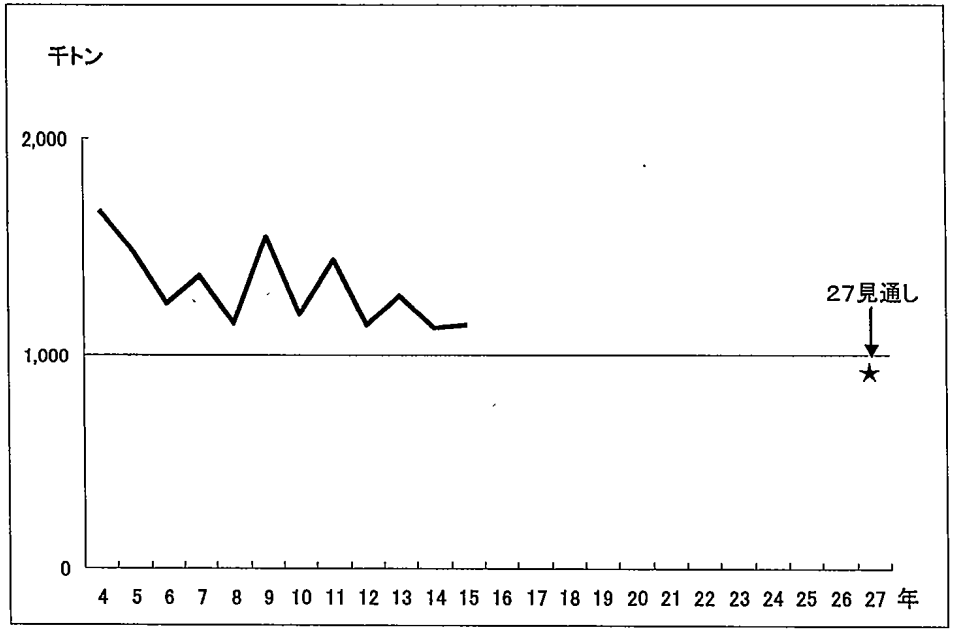
○　うんしゅうみかんの消費量は、減少傾向にあり、今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

今後、うんしゅうみかんに含まれる健康機能性成分（β－クリプトキサンチン等）をＰＲすることで、一定の消費量を確保し、需要の底支え効果は期待できるものの、消費量の27年度見通しは、現状を大幅に下回ると見込んでいる。

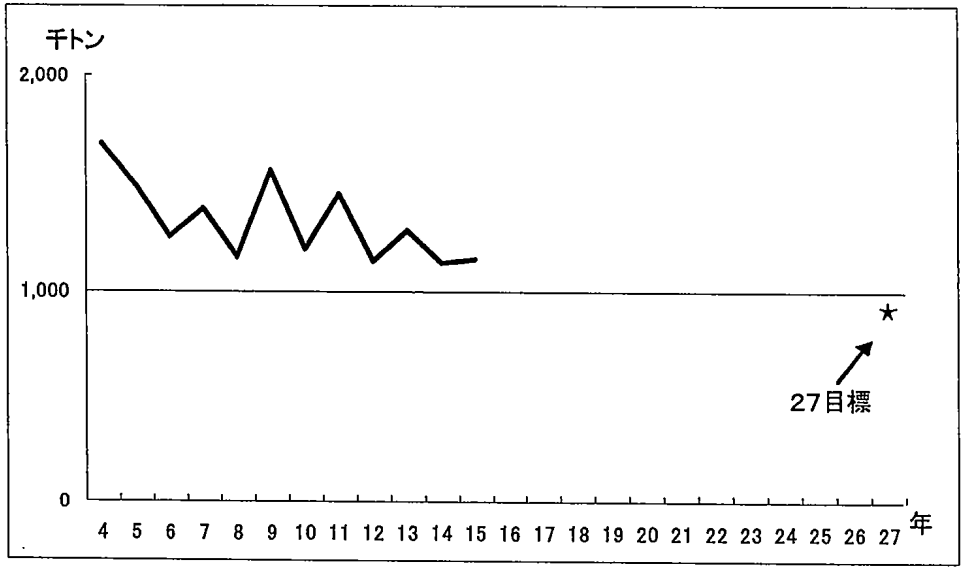
○　一方、生産面では、13年度から実施している需給調整・経営安定対策により隔年結果の是正が進展し、単収は表年がわずかに減少傾向、裏年がわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあり、生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

今後、競争力の強い産地体制を構築し、需要に見合った生産を行うため、過剰感のあるうんしゅうみかんから、国産果実の端境期需要への対応など消費者ニーズに応えうる高品質品目・品種への改植及び急傾斜地等の条件不利園地の廃園を推進することとしていることから、27年度目標は、現状を大幅に下回ると見込んでいる。

○　うんしゅうみかんの消費量の推移及び27年度見通し



○　うんしゅうみかんの国内生産量の推移及び27年度目標



3　その他のかんきつ（うんしゅうみかん以外のかんきつ）

(1) 国産

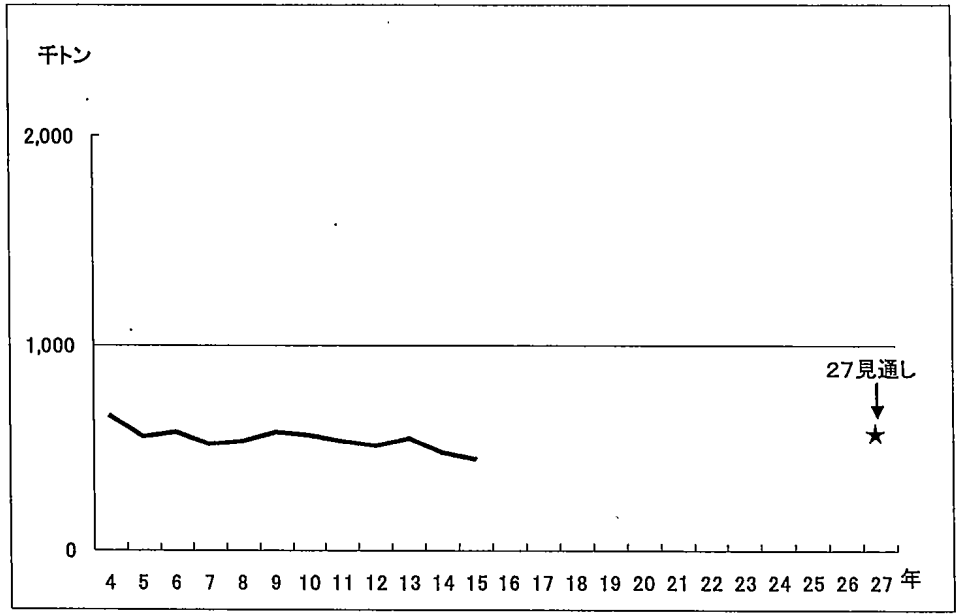
○　うんしゅうみかん以外の国産かんきつのうち、不知火等、一部の品目で消費量が増加しているものの、四晩かん（なつみかん、いよかん、はっさく及びネーブルオレンジ）の消費量は、減少傾向にある。このため、国産かんきつについては、今後とも減少傾向が継続するものと見込まれる。

しかしながら、うんしゅうみかんや四晩かんから転換される消費者のニーズにあった高糖系で皮のむきやすい晩かん類が４月～６月の国産果実の端境期の需要を確保し、消費量の増加が期待できることから、27年度見通しは、現状を大幅に上回ると見込んでいる。

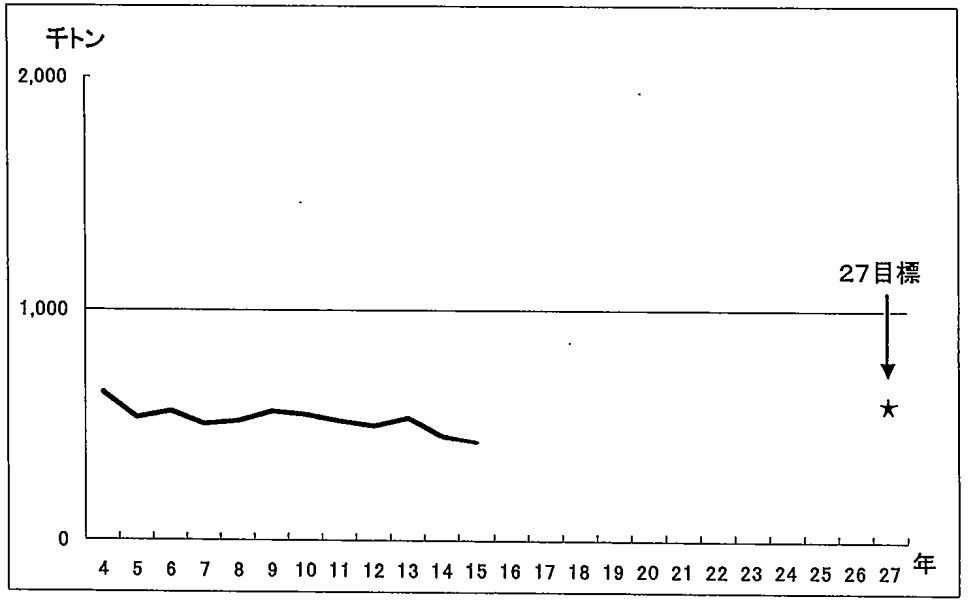
○　一方、生産面では、四晩かんについては、栽培面積が大幅に減少しているが、近年、清見、不知火等高糖系中晩かんが、四晩かんほどの栽培面積にはなっていないものの急増しており、生産量は今後はほぼ横ばいで推移すると見込まれる。

また、新しい品種として「はるみ」、「せとか」等、高糖系で皮のむきやすい品種が育成され、栽培面積が増加していることや、うんしゅうみかんから、「清見」、「不知火」等国産果実の端境期需要へ対応した高品質品目・品種への改植等を推進することとしていることから、27年度目標は、現状を大幅に上回ると見込んでいる。

○　その他かんきつ（国産）の消費量の推移及び27年度見通し



○　その他かんきつの国内生産量の推移及び27年度目標

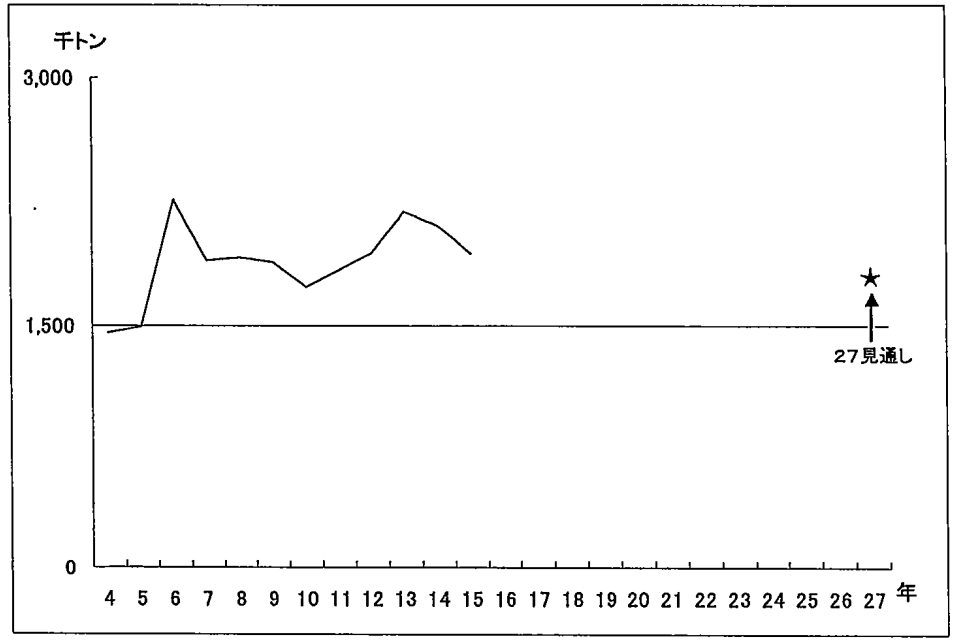


(2) 輸入かんきつ

○　輸入かんきつ（オレンジ、グレープフルーツ、レモン）の消費量は、生鮮、加工とも横ばいであり、今後とも同様の傾向が継続するものと見込まれる。

しかしながら、輸入かんきつの消費量については、国産の高品質な中晩かんの消費量の増加により減少することから、27年度見通しは、現状を下回ると見込んでいる。

○　その他かんきつ（輸入）の消費量の推移及び27年度見通し



4　りんご

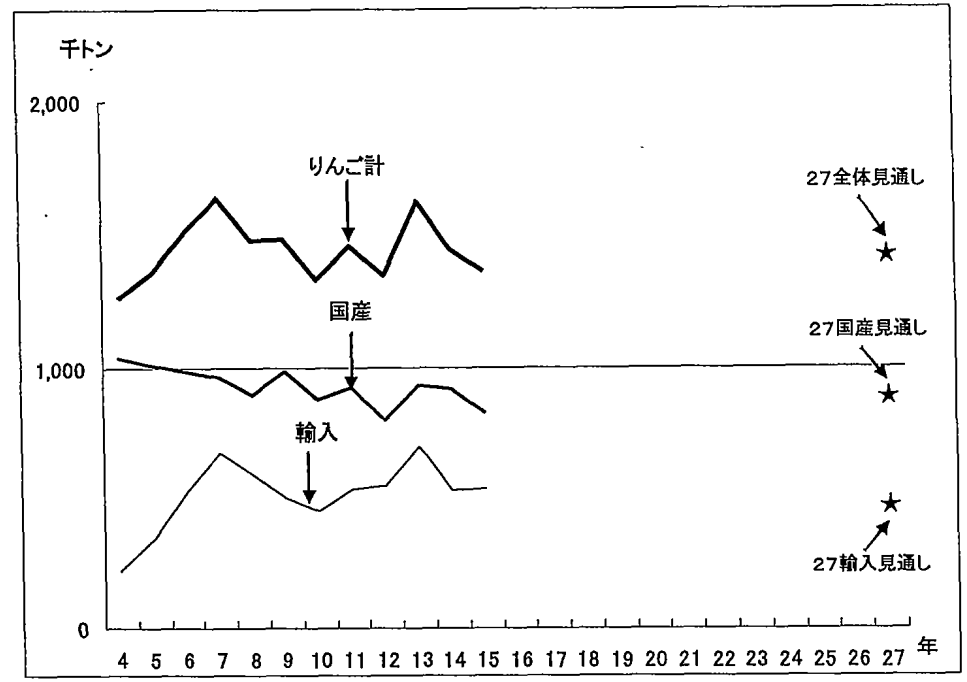
○　生鮮果実を中心とする国産りんごの消費量は、近年、減少傾向にあり、今後とも同様の傾向が継続すると見込まれる一方、果汁を中心とするりんごの輸入品の消費量は、近年はほぼ横ばいであり、今後とも現状と同程度で推移すると見込まれる。このため、りんご全体では、消費量が減少すると見込まれる。

今後、国産りんごの良質品種の育成・導入により需要の底支えが図られ、現状と同程度の消費量を確保することから、りんご全体の27年度見通しは、現状と同程度と見込んでいる。

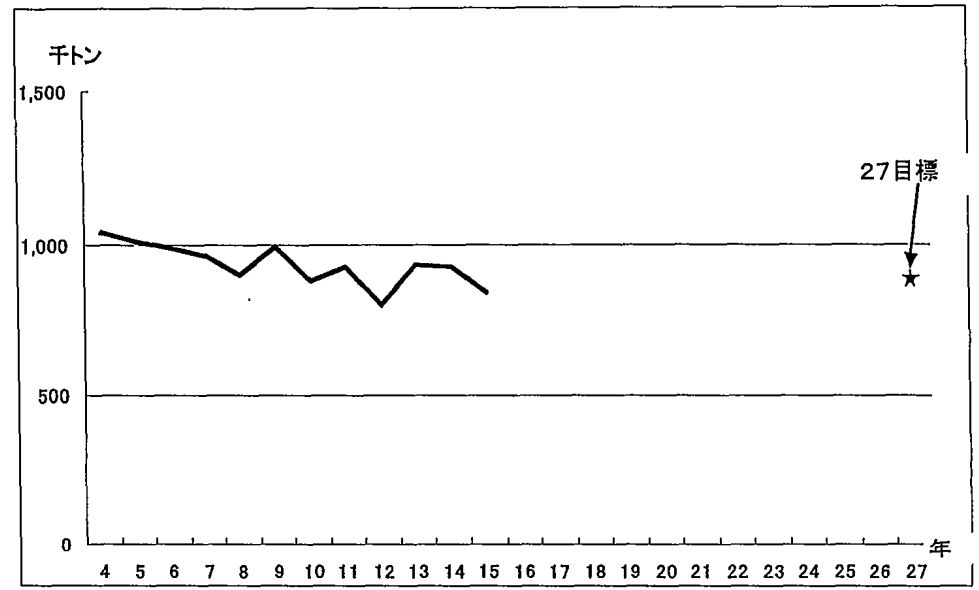
○　一方、生産面では、「ふじ」が栽培面積の過半を占め、「ふじ」偏重傾向となっている中、単収がわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあることから、生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

現在、出荷の前進化等を目的とした「シナノスイート」や「秋映」、「きおう」などの早・中生の優良品種の育成・導入が進められる等、ふじ偏重傾向の生産体制からの転換を図るとともに、輸出向けに一定の生産量を見込むものとして、27年度目標は、現状と同程度と見込んでいる。

○　りんごの消費量の推移及び27年度見通し



○　りんごの国内生産量の推移及び27年度目標



5　ぶどう

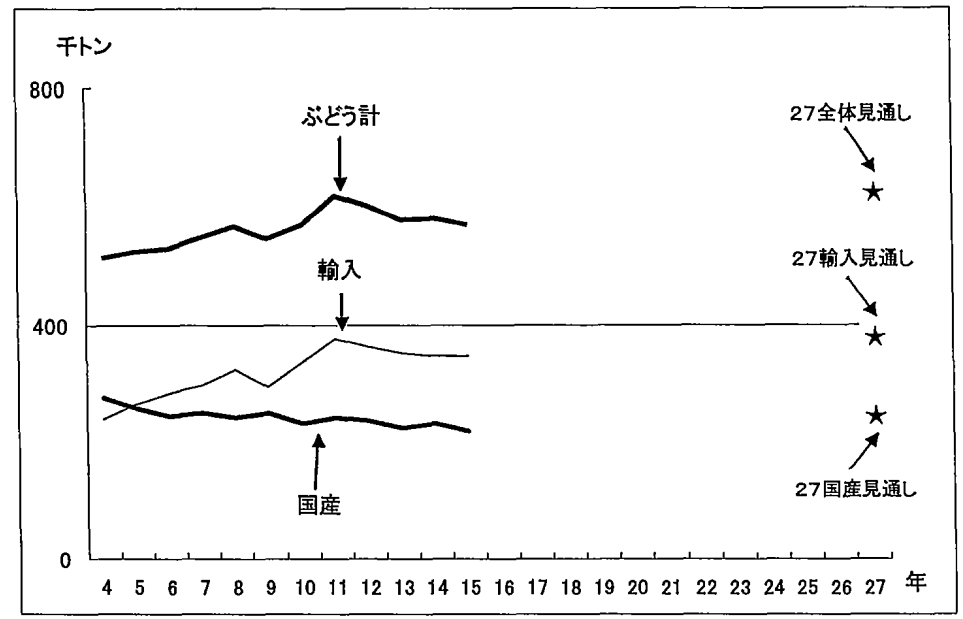
○　ぶどうの消費量のうち、生鮮果実を中心とする国産果実は、わずかに減少傾向で推移しており、今後とも減少傾向が継続すると見込まれる一方、果汁を中心とする輸入品の消費量は、増加傾向にあり、今後とも同様の傾向で推移すると見込まれる。

国産ぶどうについては、近年、大粒で種のない品種へ更新されており、消費量の維持が期待できることから、ぶどう全体の27年度見通しは、現状を上回ると見込んでいる。

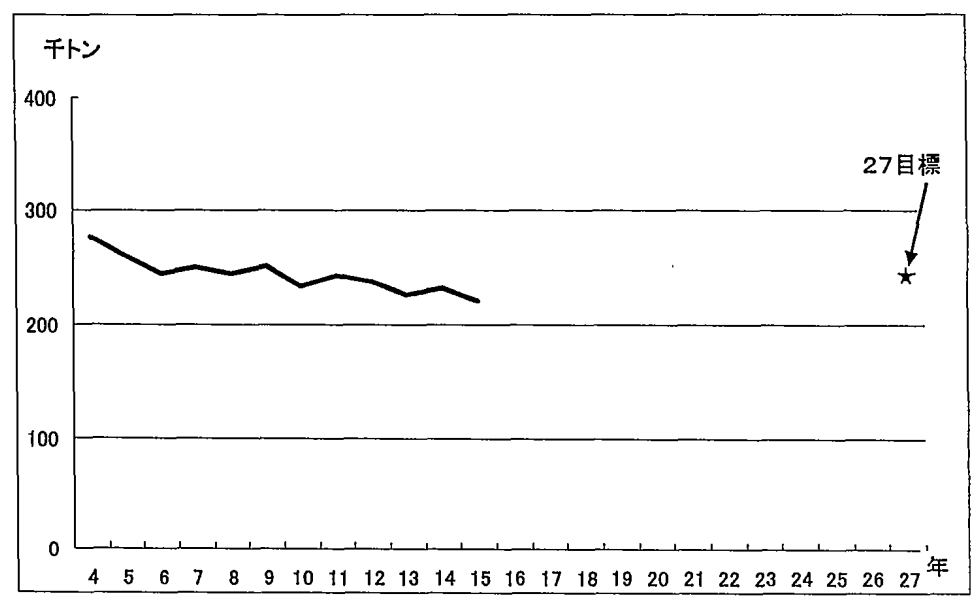
○　一方、生産面では、 単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあることから、生産量は今後はわずかに減少傾向で推移すると見込まれる。

現在、近年の消費者の大粒系嗜好への変化に伴い、各県において「巨峰」や「ピオーネ」を中心に大粒系品種への転換が進められるとともに、「安芸クイーン」や「藤稔」等の大粒系品種が開発されていることから、27年度目標は、現状を上回ると見込んでいる。

○　ぶどうの消費量の推移及び27年度見通し



○　ぶどうの国内生産量の推移及び27年度目標



6　なし（日本なし及び西洋なし）

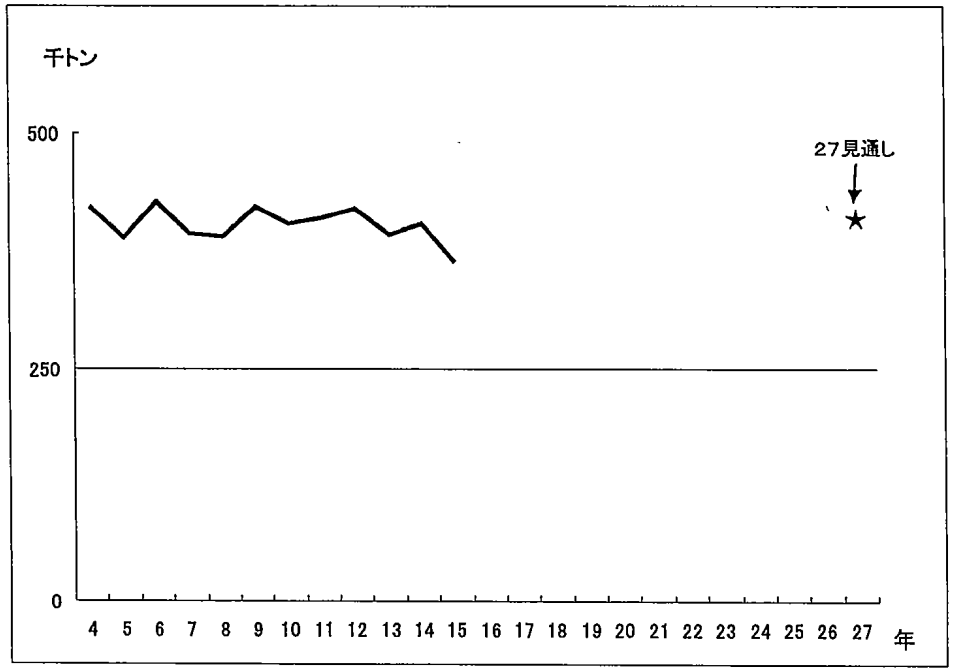
○　なしの生鮮果実の消費量は、日本なしについては、減少傾向、西洋なしについては、増加傾向で推移しており、なし全体では減少傾向が継続すると見込まれる。

今後、日本なしについては、高品質な新品種への転換が進展し、新たな需要が期待できるとともに、西洋なしについても引き続き消費量が増加すると見込まれることから、なし全体の27年度見通しは、現状を上回ると見込んでいる。

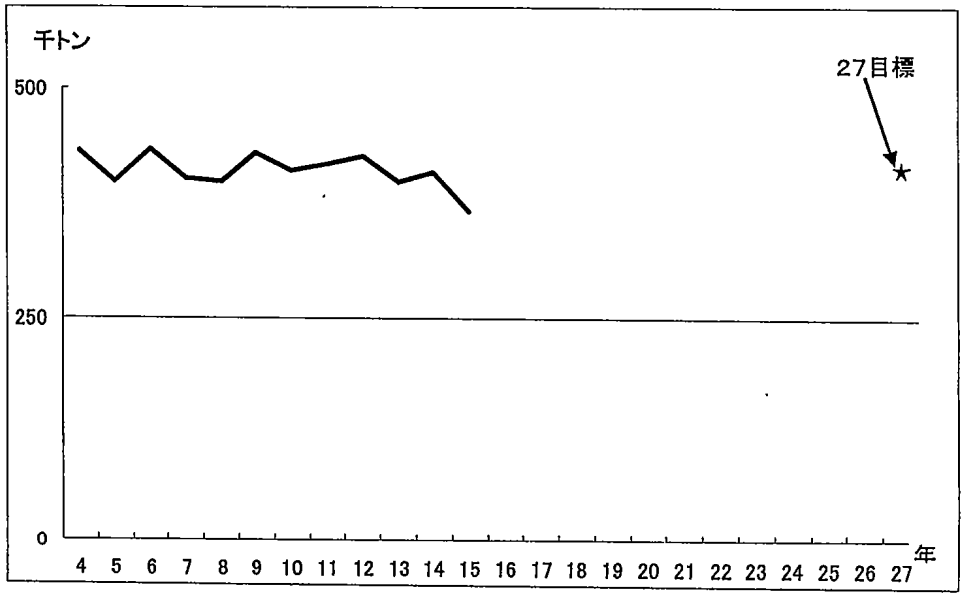
○　生産面では、日本なしについては、単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積の減少傾向により生産量が減少傾向にある一方、西洋なしの栽培面積が、堅調な需要に支えられ増加傾向にあり、なし全体の生産量は今後はわずかに減少傾向で推移すると見込まれる。

現在、日本なしでは、減少傾向にあった「二十世紀」から黒斑病抵抗性を持つ「ゴールド二十世紀」、長野県での「南水」等、高品質品種への転換や主産県での新品種の開発が進められていること、また、西洋なしでは、２年産から新植が進められた「ラ・フランス」の一層の単収増加や早生種である「越さやか」等の高品質品種の開発が進められていることから、27年度目標は、現状を上回ると見込んでいる。

○　なしの消費量の推移及び27年度見通し



○　なしの国内生産量の推移及び27年度目標



7　もも

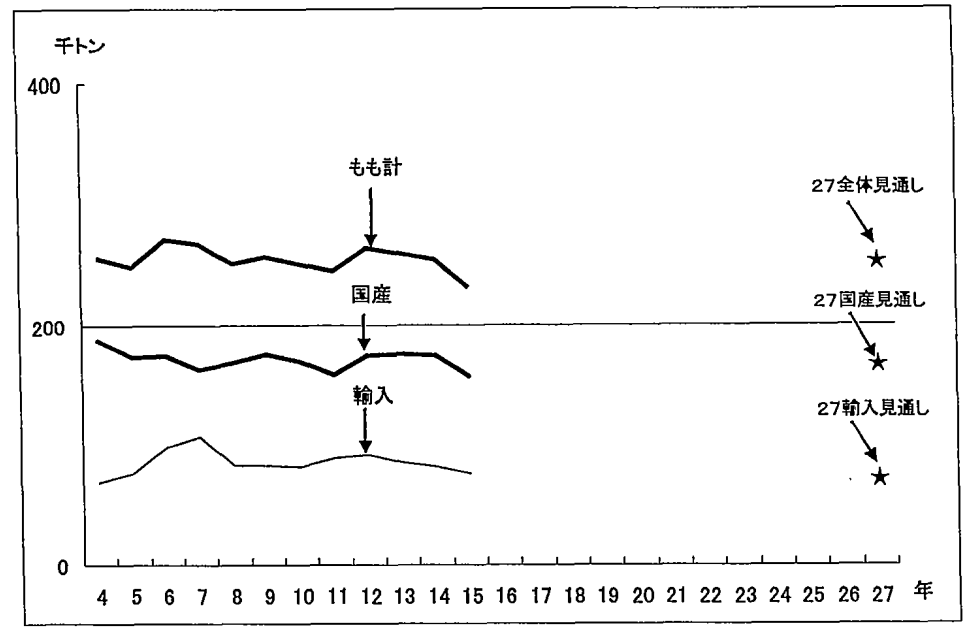
○　ももの消費量のうち、国産については、生鮮果実の需要は堅調であるものの、加工需要の減少により、全体で減少傾向で推移している一方、輸入加工品の消費量については、ほぼ横ばいで推移しており、今後とも同様の傾向が継続すると見込まれる。

今後、輸入加工品については、同様の傾向が継続すると見込まれるとともに、国産を中心とする生鮮果実については、光センサー選果等の取組みにより高品質な果実が供給され消費量の維持が期待できることから、もも全体の27年度見通しは、現状と同程度と見込んでいる。

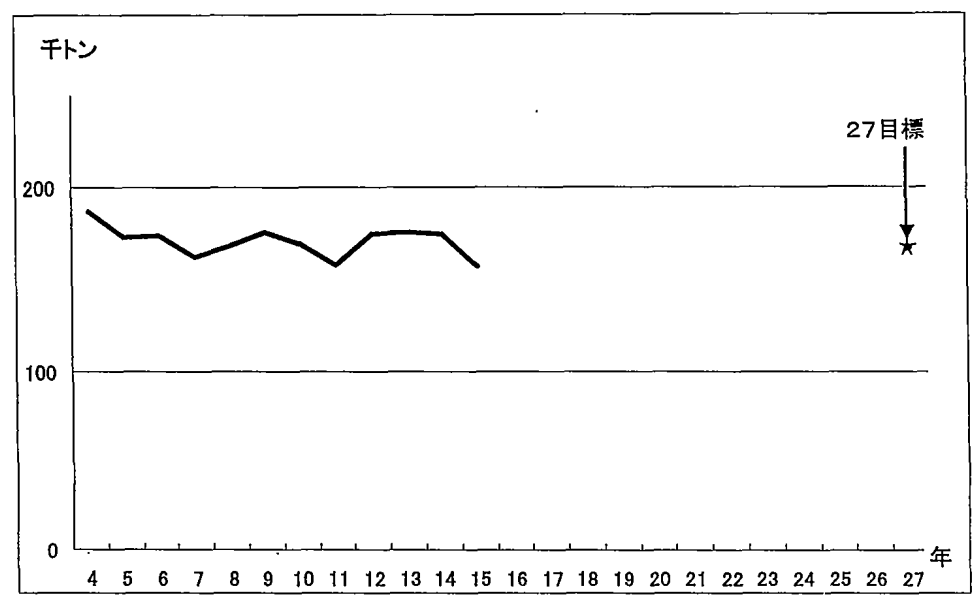
○　一方、生産面では、11年産、15年産においては大雨、日照不足等の天候不順により著しく生産量が減少したが、近年、栽培面積はわずかに減少傾向にあるものの、単収が増加傾向にあり、生産量は今後は横ばいで推移すると見込まれる。

現在、ももについては、中生種の「白鳳」から、早生種の「日川白鳳」、中生種の「あかつき」、中晩生の「川中島白桃」等への転換が図られているところであること、また、「なつっこ」等新品種の開発も行われていることから、27年度目標は、現状と同程度と見込んでいる。

○　ももの消費量の推移及び27年度見通し



○　ももの国内生産量の推移及び27年度目標



8　おうとう（さくらんぼ）

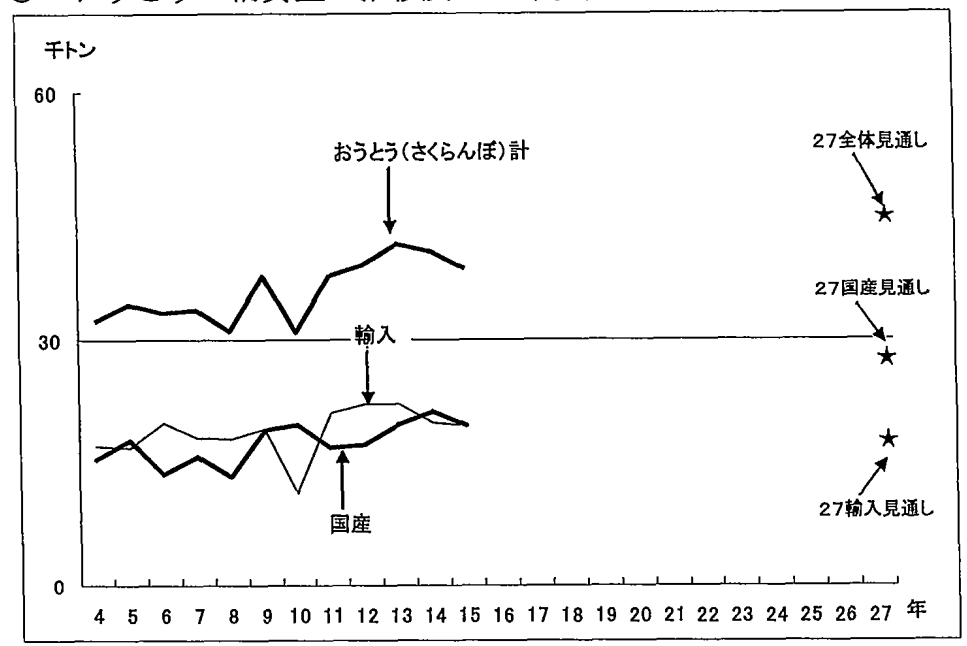
○　おうとうの消費量のうち、国産については増加傾向、輸入については、変動が大きいものの横ばいで推移しており、今後とも同様の傾向が継続すると見込まれる。

今後、輸入については、一定の需要があるものの、わずかに減少する一方で、品質の良い国産については、引き続き堅調な需要があることから、おうとうの27年度見通しは現状を上回ると見込んでいる。

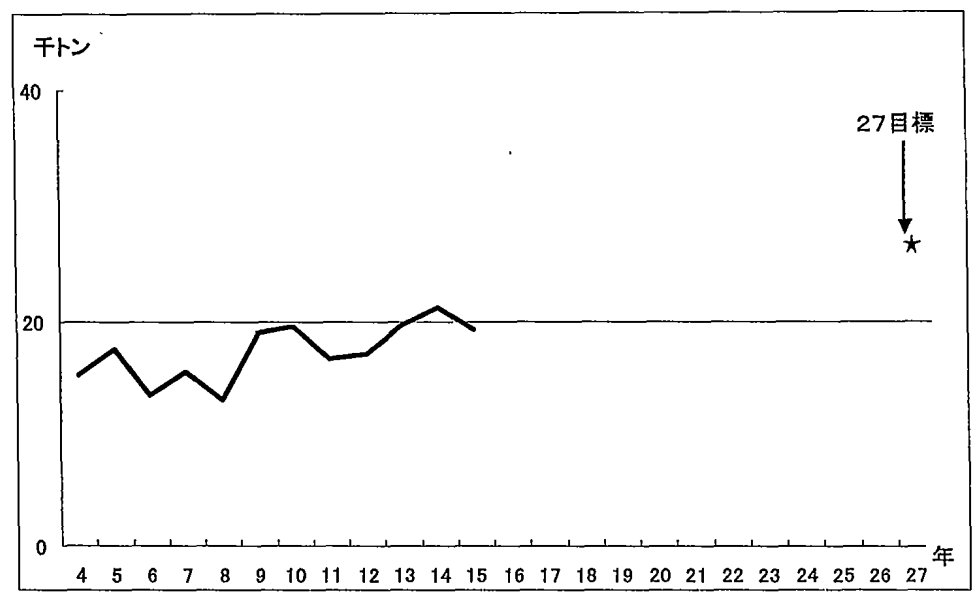
○　一方、生産面では、堅調な需要に支えられ栽培面積が増加傾向にあり、４年産から15年産で大きく増加したこと、また、２年産から10年産まで新植、改植が積極的に進められ、樹体の生長に伴い単収が増加傾向にあることから、生産量は今後とも増加傾向が継続すると見込まれる。

２年産から10年産までに新植、改植された樹体の生長に伴う単収の一層の増加に加え、「佐藤錦」をもとに交配した早生種の「紅さやか」、極晩生種の「紅てまり」等の大玉で高糖度の品種の開発・生産拡大が図られていることから、27年度目標は、現状を大幅に上回ると見込んでいる。

○　おうとうの消費量の推移及び27年度見通し



○　おうとうの国内生産量の推移及び27年度目標



9　びわ

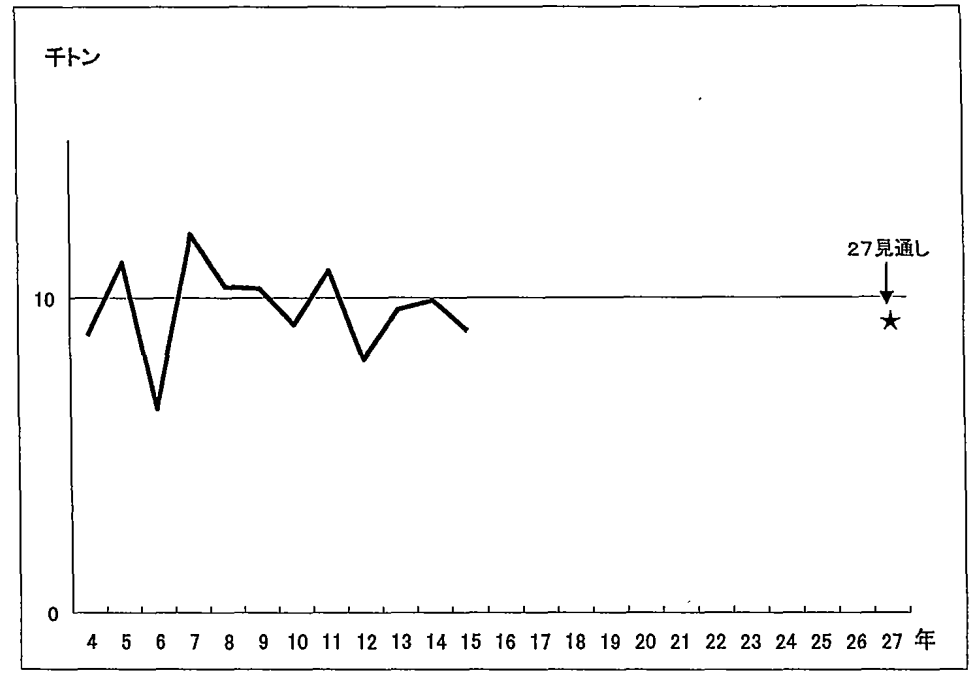
○　びわの消費量は、１万トン前後で、近年、わずかに減少傾向となっており、今後とも同様の傾向が継続するものと考えられる。

びわは、産地や出荷時期が限定された特産果実の代表的な品目であることや良品質な新品種も開発されているとともに、今後とも、一定の需要を確保することが見込まれることから、27年度見通しは、現状と同程度と見込んでいる。

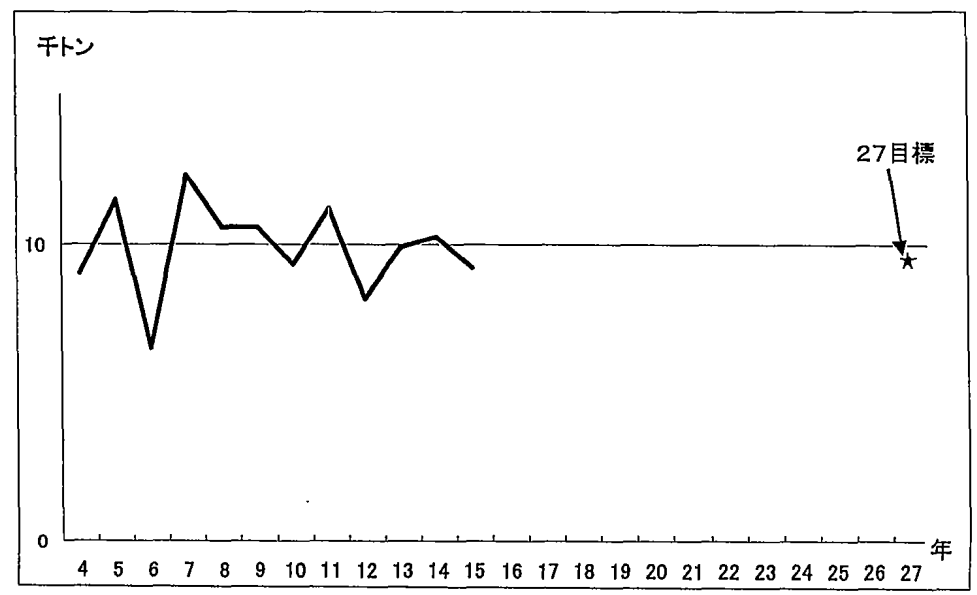
○　一方、生産面では、単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあることから、生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

現在の主力品種である「茂木」や「長崎早生」についても減少傾向にある一方、長崎県において「涼風」、「陽玉」、「麗月」等の高品質品種が開発されていることから、27年度目標は、現状と同程度と見込んでいる。

○　びわの消費量の推移及び27年度見通し



○　びわの国内生産量の推移及び27年度目標



10　かき

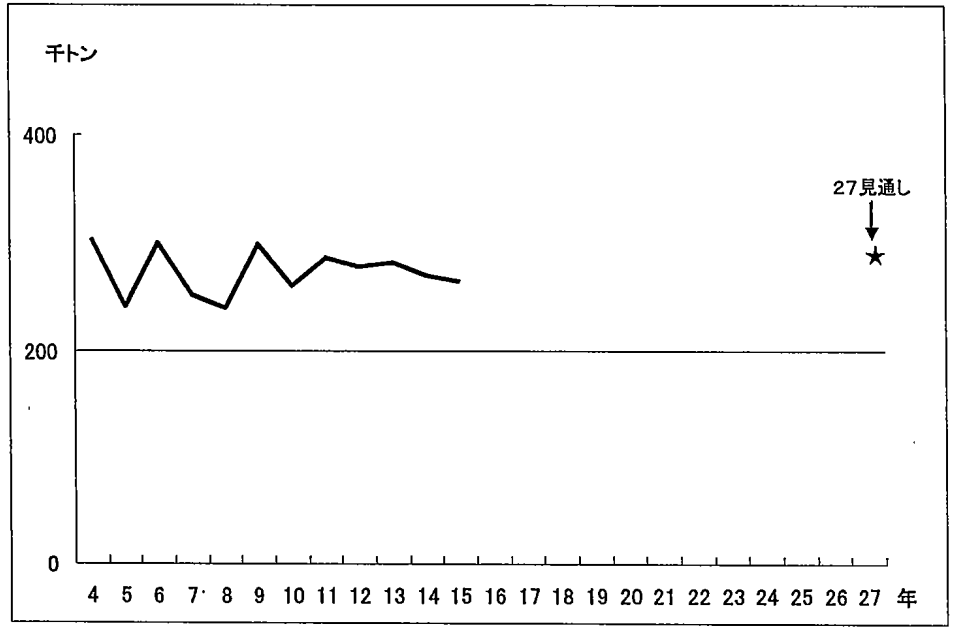
○　かきの消費量は、近年ほぼ横ばいであり、今後とも同様の傾向が継続すると見込まれる。

今後、ハウス栽培から冷蔵柿までの長期出荷への取組に加え、新たな高品質新品種が開発・普及され、消費量の拡大が期待できることから、かきの27年度見通しは、現状を上回ると見込んでいる。

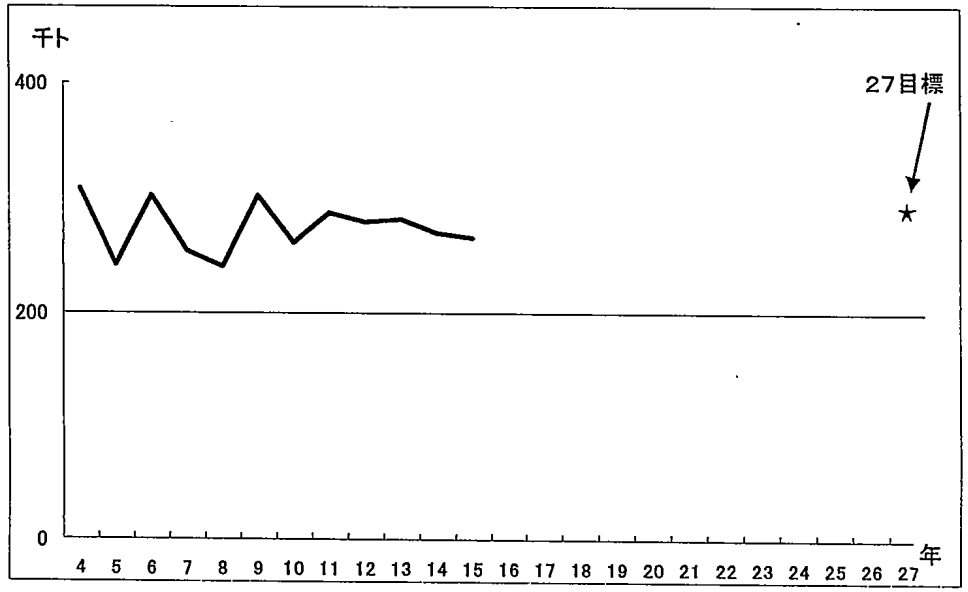
○　一方、生産面では、単収は増加傾向にあるものの、栽培面積は減少傾向にあることから、生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

全体として大幅に減少傾向にある甘がきにおいて、主力品種の「富有」に変わり、早生種で日持ちの良い「早秋」、極大の「太秋」等の新品種の開発・普及が図られていること、生産量を維持している渋がきについては、増加傾向にある「刀根早生」に加え、より早生種の「中谷早生」の開発等が図られ、生産拡大が図られていることから、27年度目標は、現状を上回ると見込んでいる。

○　かきの消費量の推移及び27年度見通し



○　かきの国内生産量の推移及び27年度目標



11　くり

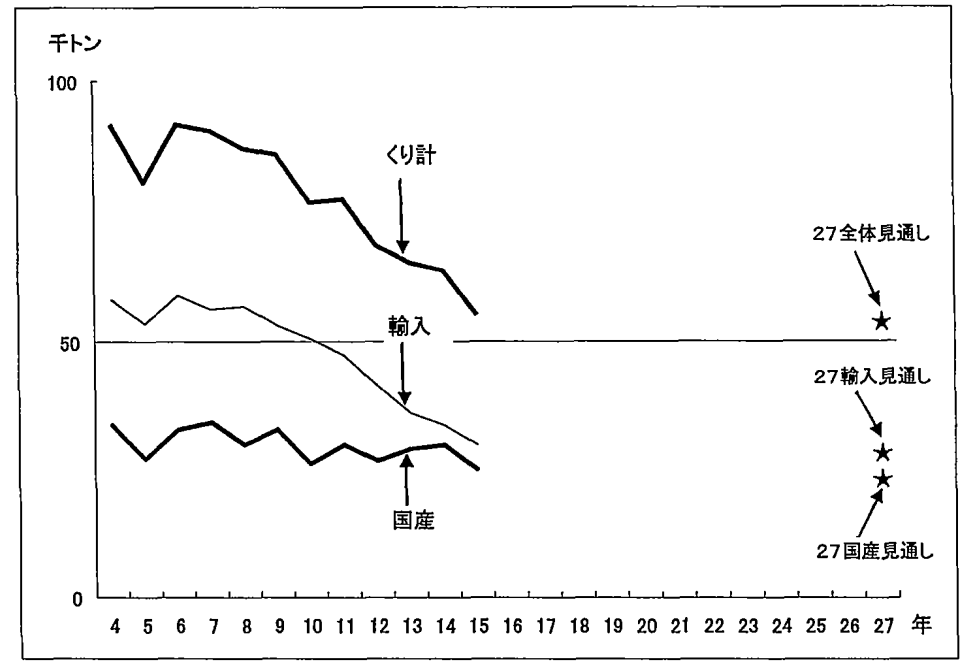
○　くりの消費量は、国産、輸入とも簡便化志向の進展により、減少傾向にあり、27年度のすう勢としては、今後とも同様の傾向が継続すると見込まれる。

今後、くりについては、需要量の減少が引き続き継続することから、27年度見通しは、現状を下回ると見込んでいる。

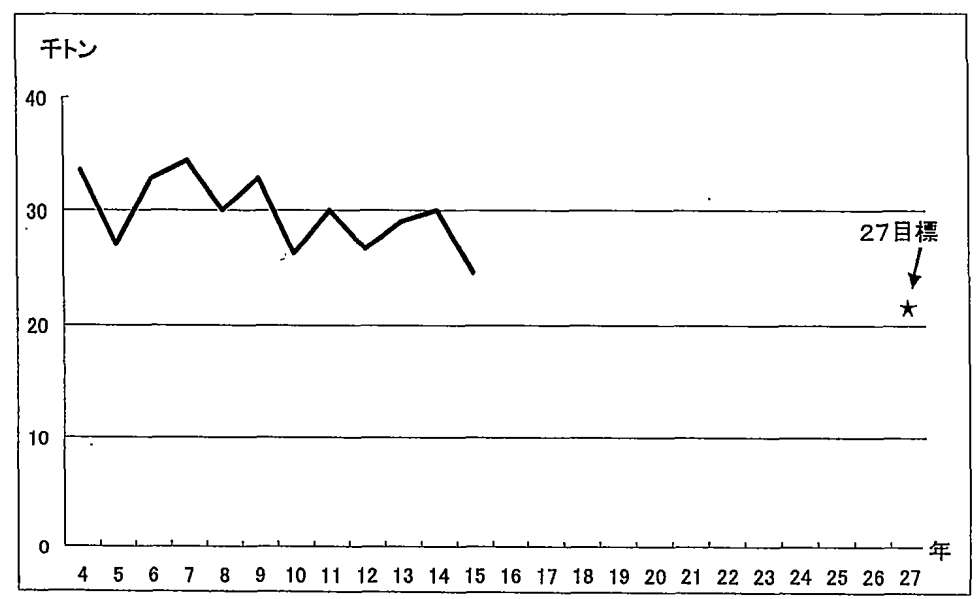
○　一方、生産面では、単収はほぼ横ばい、栽培面積は減少傾向にあることから、生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

現在、各産地において、食味の良い早生種である「ソフト西明寺」、「神峰」等の高品質品種が開発され、生産拡大が図られているものの、減少傾向を止めるほどの効果が期待されないことから、27年度目標は、現状を下回ると見込んでいる。

○　くりの消費量の推移及び27年度見通し



○　くりの国内生産量の推移及び27年度目標



12　うめ

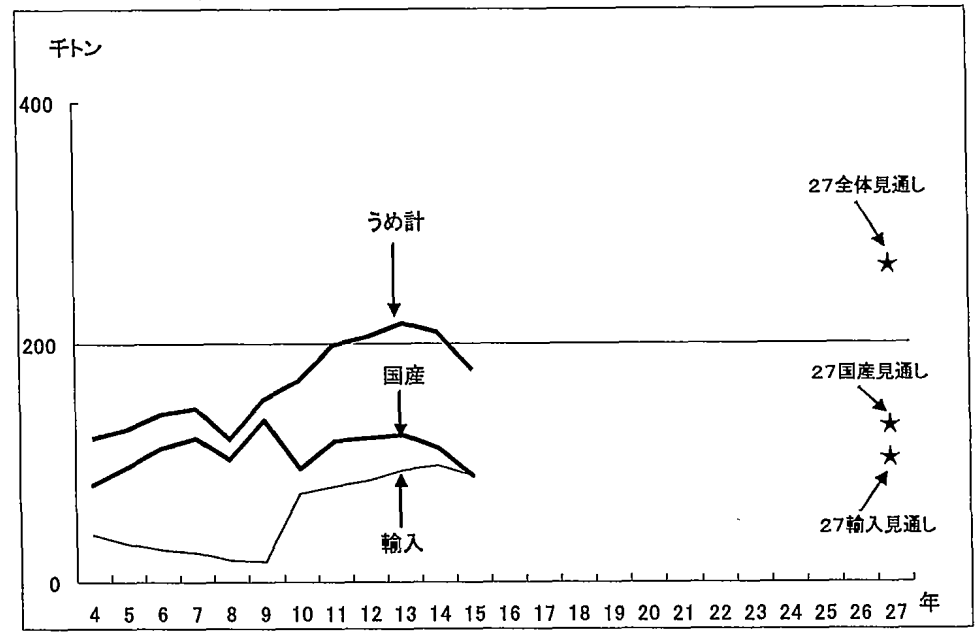
○　うめの消費量は、消費者の健康志向の高まり等から、増加傾向で推移しており、今後とも同様の傾向が継続すると見込まれる。

今後とも消費者の健康志向の進展と併せて消費量の増加が期待できることから、27年度見通しは、現状を大幅に上回ると見込んでいる。

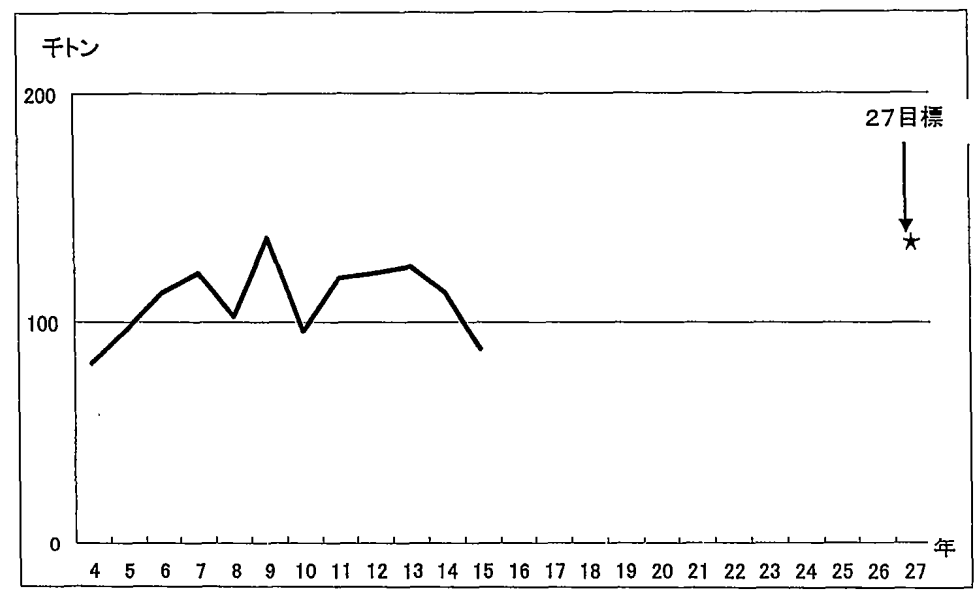
○　一方、生産面では、15年産においては、開花期間中の低温等による影響で著しい生産量の減少が生じたが、９年以降、概ね、単収は増加傾向にあるものの、栽培面積はわずかに減少傾向にあることから、生産量は今後はほぼ横ばいで推移すると見込まれる。

現在、主産県である和歌山県において、梅干し、加工適性に優れる「南高」への転換が図られ、順調にその栽培面積が拡大していること、豊産性で加工用に適する「新平太夫」等の高品質品種が開発され、生産拡大が図られていることから、27年度目標は、現状を大幅に上回ると見込んでいる。

○　うめの消費量の推移及び27年度見通し



○　うめの国内生産量の推移及び27年度目標



13　すもも

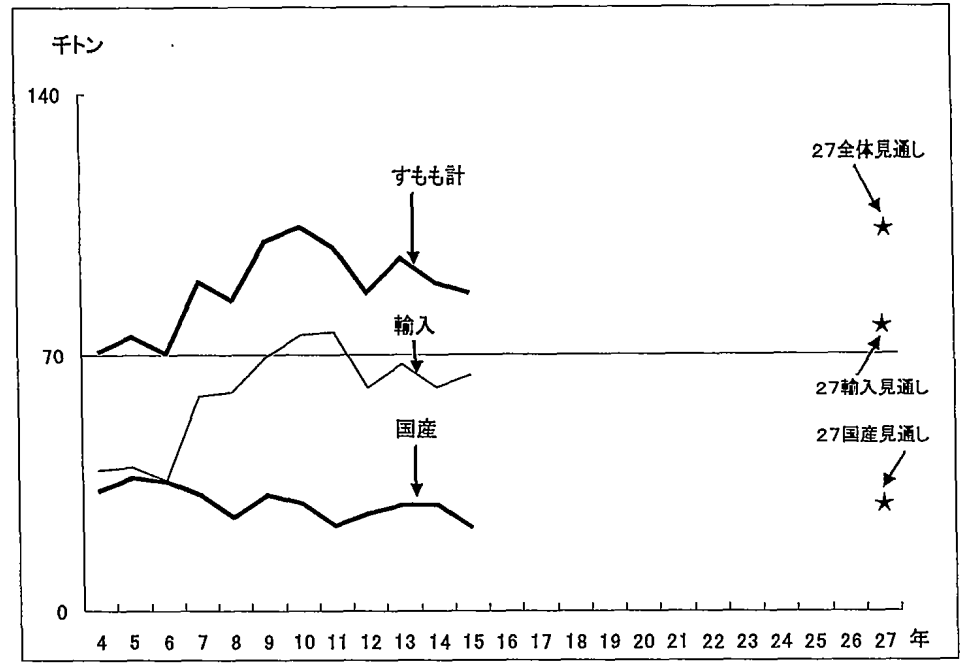
○　すももの消費量は、国産生鮮果実については減少傾向、プルーンを中心とする輸入加工品は伸びは鈍化しているものの増加傾向にあり、すもも全体では、増加傾向が継続すると見込まれる。

今後、輸入加工品については、引き続き増加するとともに、国産についても良質新品種の開発・普及により、消費量の維持が期待できることから、27年度見通しは、現状を大幅に上回ると見込んでいる。

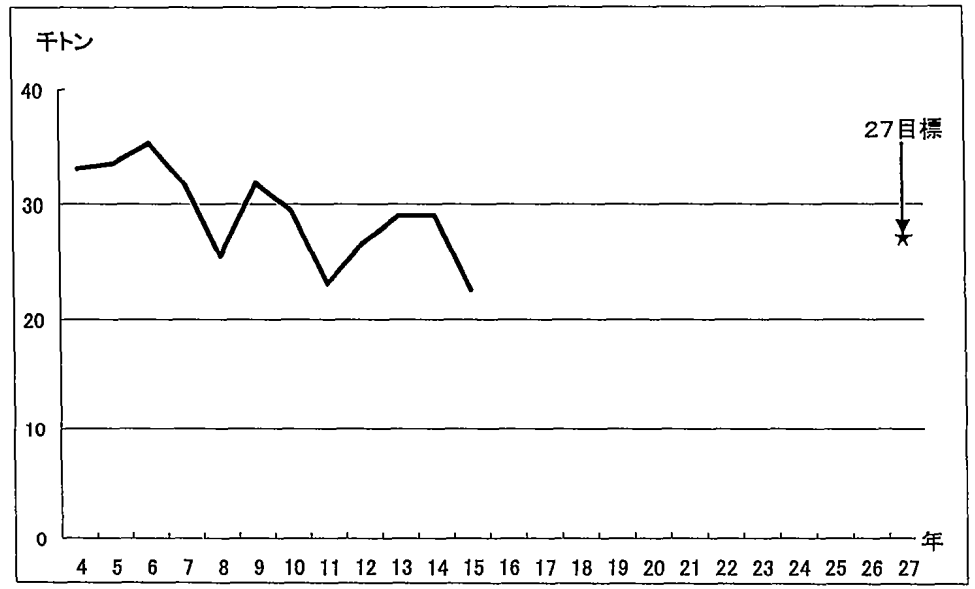
○　一方、生産面では、11年産、15年産においては低温・降雨等の天候不順により著しく生産量が減少したところであるが、近年の傾向は、単収はわずかに増加傾向にあるものの、栽培面積が減少傾向にあることから、生産量は今後はわずかに減少傾向で推移すると見込まれる。

近年、山梨県において、晩生種の「太陽」の栽培面積が拡大していること、また、「貴陽」、「シンジョウ」等の高糖度品種が開発され、生産拡大が図られていることから、27年度目標は、現状と同程度と見込んでいる。

○　すももの消費量の推移及び27年度見通し



○　すももの国内生産量の推移及び27年度目標



14　キウイフルーツ

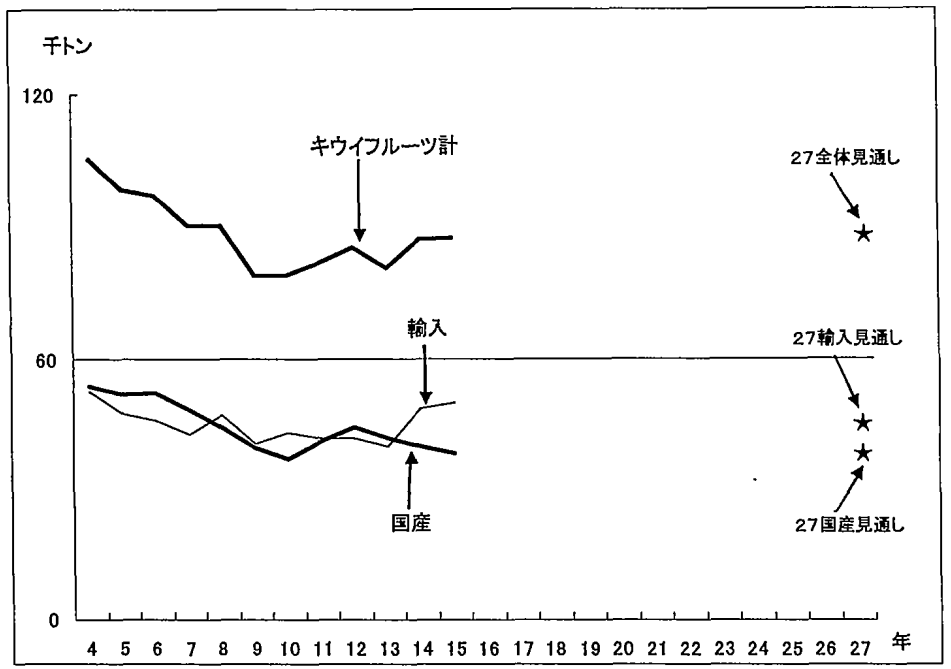
○　キウイフルーツの消費量は、国産については、減少傾向にあり、今後とも同様の傾向が継続すると見込まれる一方、輸入品については、平成14年以降、ゼスプリ・ゴールド等高糖系品種が出荷され、消費量は一転して増加している状況にある。

今後、国産については、輸入品と同様に高品質な高糖度系品種が開発・普及され、輸入品と相まって国産果実の消費量の増加が期待できることから、キウイフルーツ全体の27年度見通しは、現状を上回ると見込んでいる。

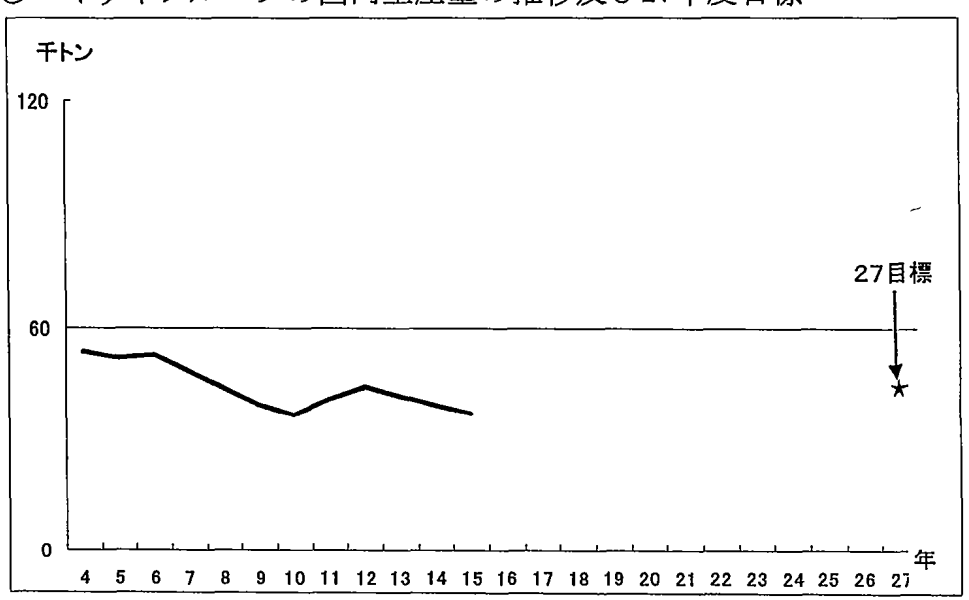
○　一方、生産面では、単収はわずかに増加傾向にあるものの、主力品種の「ヘイワード」が、栽培規模を縮小するなど、栽培面積が減少傾向にあることから、生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

しかし、新たな品種として、「香緑」、「香粋」等の高糖度系の高品質品種が開発され、生産拡大が図られていることから、27年度目標は、現状を上回ると見込んでいる。

○　キウイフルーツの消費量の推移及び27年度見通し



○　キウイフルーツの国内生産量の推移及び27年度目標



15　パインアップル

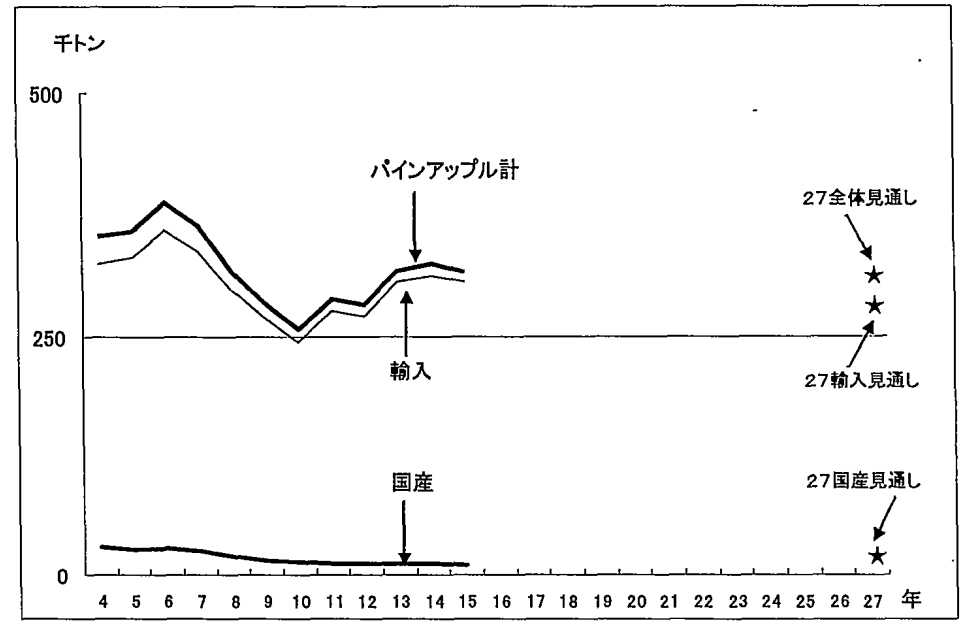
○　パインアップルの消費量は、平成10年度まで減少傾向で推移したが、近年、高糖系品種の供給やカットフルーツへの供給により増加したものの、今後、現状とほぼ同程度で推移すると見込まれる。

今後、国産生鮮果実の端境期に高品質な国産生鮮果実が出回ることにより、輸入品の消費量が減少することから、27年度見通しは、現状を下回ると見込んでいる。

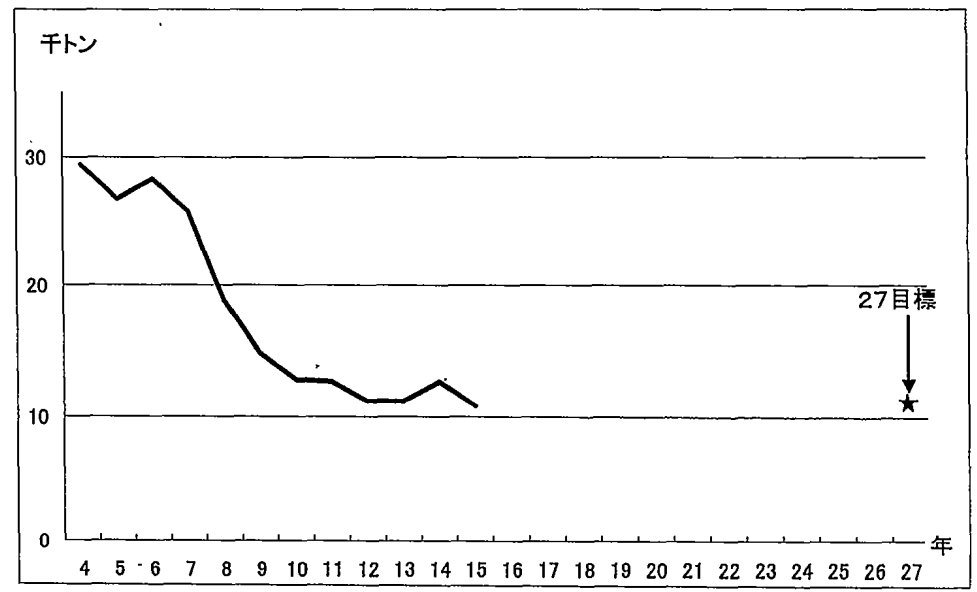
○　一方、生産面では、栽培面積が大幅な減少傾向にあることから、生産量は今後とも減少傾向が継続すると見込まれる。

しかし、贈答、直販、みやげ等において、国産パインアップルの需要が依然と見られることから、27年度目標は、現状と同程度と見込んでいる。

○　パインアップルの消費量の推移及び27年度見通し



○　パインアップルの国内生産量の推移及び27年度目標

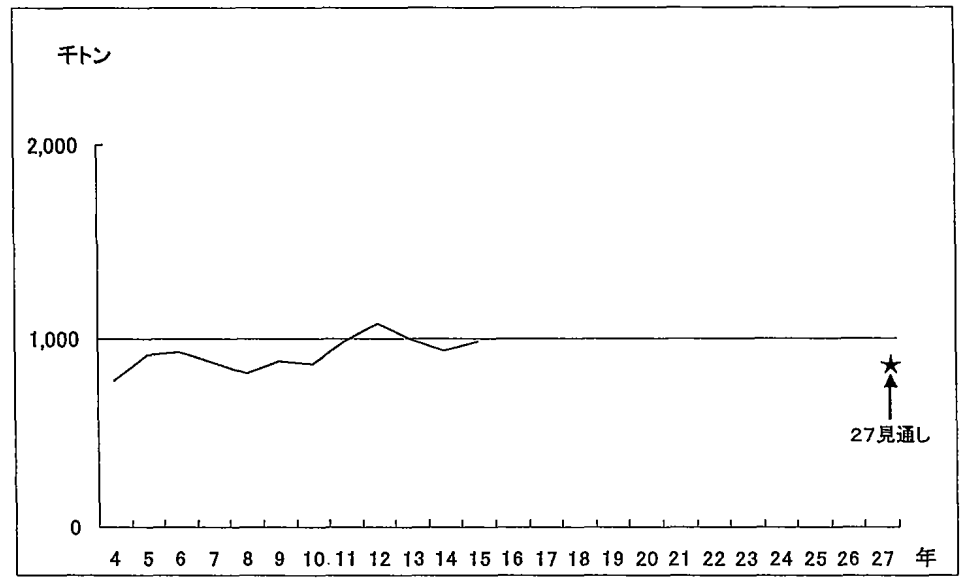


16　バナナ

○　バナナの消費量は、近年の簡便化志向等にマッチしていることや健康機能性が注目されたこともあって増加傾向にあったが、今後は、増加傾向が鈍化し、現状をわずかに上回る程度で推移すると見込まれる。

今後、国産生鮮果実の端境期に高品質な国産生鮮果実が出回り、消費が国産果実にシフトすることから、27年度見通しは、現状を下回ると見込んでいる。

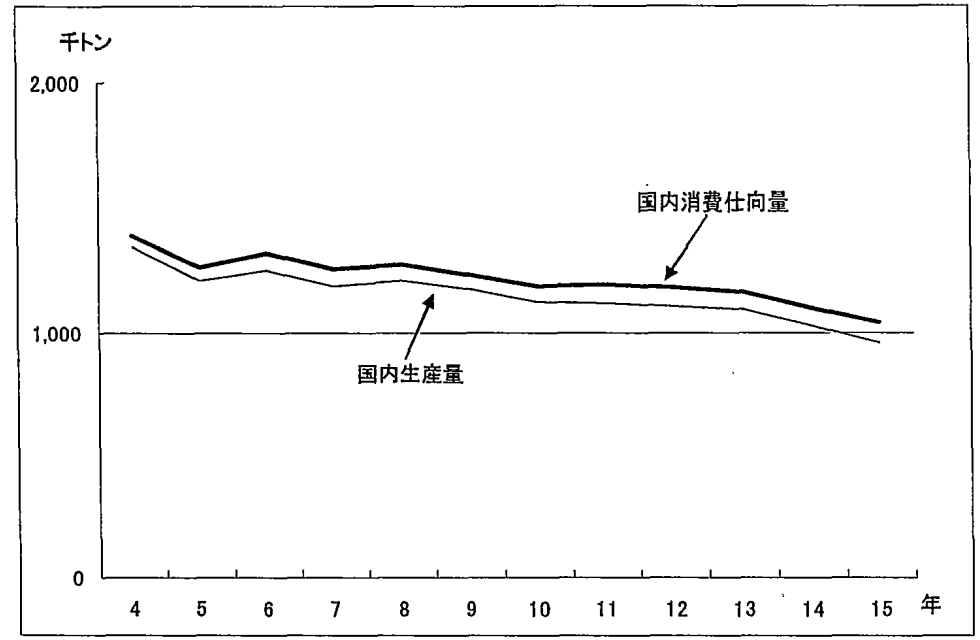
○　バナナの消費量の推移及び27年度見通し



（参考）　果実的野菜の消費動向

○　果実的野菜（いちご、すいか、メロン）の消費量は、減少傾向にあり、平成15年には104万トンとなっている。品目別に見るといちごでは横ばい傾向、すいか、メロンは減少傾向にある。

一方、生産面では、近年、栽培面積が減少傾向にあり、いちごは、近年減少面積が小さくなっているものの、すいか、メロンについては大きく減少している。

これに伴い生産量は減少傾向にあり、平成15年における果実的野菜の生産量は96万トンとなっている。

○　果実的野菜の消費量等の推移